



ベルナルド・ベロット《サン・マルコ広場》1714年以前、個人蔵、ミラノ Collezione Privata, Milano, Courtesy F. Grechi

企画展

《開館35周年記念》

「ヴェネツィア絵画のきらめき

—栄光のルネサンスから華麗なる18世紀へ— 2

- 交流展「万里の長城写真展 —河北省の長城と歴史—」.....2
- 企画展「因幡・伯耆の王者たち」.....3
- 共同企画展「郷土作家展 書の宇宙・陶の大地 柴山抱海・山本浩彩」
- [自然] 観察ガイド「千代川の川原の石」.....4
資料紹介「イソコモリグモの拡大模型」
- [人文] 資料紹介「三仏寺蔵王権現立像(複製)」.....5
コラム「流れ着いた江戸のクジラ」
- [美術] コラム「屏風の世界」.....6
新収蔵品紹介沖一峨「花鳥図」、連載「学芸員という仕事」第4回
- [山陰海岸学習館だより]夏のイベント大盛況！.....7
- [お知らせ]空調設備の改修
- [新着情報]「鳥取県の祭り・行事」データベースを公開
- 美術常設展示
- 講座・観察会・アートシアター、展覧会カレンダー8



企画展 《開館35周年記念》

ヴェネツィア絵画のきらめき

—栄光のルネサンスから華麗なる18世紀へ—

この秋、鳥取県立博物館は開館35周年を迎えます。その記念として当館では、北イタリアの水の都・ヴェネツィアの絵画展を開催します。

運河を行き交うゴンドラや、シェイクスピアの戯曲「ヴェニス商人」等で有名なヴェネツィア(英語名:ヴェニス)は、その美しい景観によって世界有数の観光都市に数えられています。しかし、今から2世紀余り前までは、1,100年間にもわたる独立を貫いた有力な共和制国家でした。地中海貿易の拠点として栄えたヴェ



ジョヴァンニ・ベッリーニと工房《聖母子と洗礼者聖ヨハネ》
1500年頃、ドーリア・パンプフィーリ美術館蔵、ローマ
Galleria Doria Pamphilj, Roma

ネツィアでは、早くから市民社会が発達し、出版業をはじめとする様々な文化が育まれます。

さて、今回の展覧会は、ヴェネツィアの諸文化の中でも特に際立った輝きを見せた、16世紀から18世紀までの絵画芸術をご紹介します。ティツィアーノ、テントレットなど、この地に活躍してヴェネツィア派と称された画家たちは、豊かな色遣いと大胆な筆致の油彩画によって、その後の西洋絵画に大きな影響を与えました。

本展に出品されるのは、主にイタリア国内の美術館と個人の所蔵品から選ばれた71点の油彩画です。それらを主題別に「I 宗教・神話・寓意」「II 統領のヴェネツィア」「III 都市の相貌」の3章に分け、ヴェネツィア絵画の展開を、当時の社会とのつながりの中でご理解いただけるように構成しました。第1章では、ヴェネツィア人の精神的基盤となったキリスト教や古代神話に関する絵画を、第2章では共和国の国家元首である統領の肖像画を、第3章では、都市生活の機微を描いた風俗画や肖像画、都市景観画をご紹介します。

世界中のどの地域においても、芸術は、その土地の経済的な事情や社会構造、時代の価値観などと深く結びついています。西洋美術史の中で一時代を築いたヴェネツィア絵画の優品をご鑑賞いただくと共に、それらを生み出した社会についても思いを馳せていただければ幸いです。

(美術担当学芸員 竹氏 倫子)

■会 期: 11月3日(土)~12月9日(日)

■会 場: 第1・2・3特別展示室

■料 金: 個人当日/1,200円
前売・団体/1,000円

■関連行事

- ・ミニコンサート「イタリアの響き」
11月10日(土) 13:00~13:45
演奏: ロドルフォ・ボスッチ氏、松浦ふさ代氏ほか
- ・記念講演会I「ヴェネツィア絵画の魅力」
11月11日(日) 14:00~15:30
講師: 岡田温司氏(京都大学大学院教授)
- ・記念講演会II「水の都ヴェネツィアに魅了された人々—ターナー、ラスキン、そしてモネー—」
11月18日(日) 14:00~15:30
講師: 木島俊介氏(本展監修者、共立女子大学教授)
- ・映画上映会「ヴェニス商人」
11月23日(祝・金) 14:00~16:10
- ・学芸員講座「水都ヴェネツィアの社会と絵画」
12月1日(土) 14:00~15:30
- ・学芸員によるギャラリートーク
11月4日(日)、11月25日(日) 14:00~14:45

交流展

万里の長城写真展 —河北省の長城と歴史—

中国河北省博物館と鳥取県立博物館は、1998年に友好交流館の協定を結び、相互に交流と協力関係を深めてまいりました。

今回、協定締結10年を記念し、河

北省内の「万里の長城」を紹介する展覧会を開催します。展示写真は、河北省博物館が長城調査を行った際に撮影したもので、最新の長城の様子が写し出されています。



(写真) 金山嶺長城(河北省承德市)

中国の歴代王朝が、北方民族との対立と交流の歴史の中で築いた人類史上最大の建築物であり、優れた世界文

化遺産である「万里の長城」とその歴史について、理解を深めていただければ幸いです。

(人文担当学芸員 石田 敏紀)

■会 期: 平成19年10月3日(水)
~10月24日(水) 無休

■会 場: 第1特別展示室

■料 金: 一般=180円/団体=150円

企画展

因幡・伯耆の王者たち

鳥取県内では、これまで、13,500基を超える古墳が確認されています。これは、発掘調査が行われたり墳丘などが残ったりして、目で確認できた古墳の数で、実際には、もっと多くの古墳があると考えられます。

このうち、前方後円墳(前方後方墳)は250基以上を数えます。この数は、中国地方で最多、巨大古墳が集中する大阪や奈良にも引けをとりません。意外なことですが、鳥取県は全国有数の古墳集中地域なのです。

企画展「因幡・伯耆の王者たち」は、そのように多数築かれた県内の古墳とその副葬品、埴輪、土器などを取り上げます。これまでに見つかった出土品と、それに関する最近の研究結果により、古墳の時期・性格等の再検討を行います。さらに、近年の発掘調査成果も合わせ、鳥取県の古墳時代を解き明かしていきます。



三角緑神獣鏡(南部町善段寺1号墳出土)

展示内容は、以下のとおりです。

(1)古墳とは何か

(2)古墳の始まり-前期

銅鏡や石製品などの副葬品から、県内での古墳築造の始まりを探ります。また、古墳時代前期後半に出現する大型前方後円墳について、その性格を考えます。

(3)王者たちの世紀-中期

大型前方後円墳が築かれる古墳時代中期。「王者」たる大型古墳の被葬者に、副葬品と埴輪から迫ります。また、同時期に存在する豊富な副葬品を持つ中小古墳から、社会の状況を読み解いていきます。

(4)新たな勢力の勃興-後期

古墳時代後期には、古墳が数多く築かれます。そうした群集する中小古墳とその出土品から、古墳被葬者像の変化をたどります。また、墳丘を持たない横穴墓について検討し、社会の構造を明らかにします。

(5)古墳の終わり



家形埴輪(米子市上ノ山古墳出土)

また、会場に出土品(土器、鉄器など)に触ったり、復原した甲冑を着たりできる「体験コーナー」があります。見るだけでなく、実際の重さや質感を体感することができます。

展示をとおして、身近な文化財である古墳を知っていただき、郷土の歴史に思いを馳せていただければと思います。

(人文担当学芸員 東方 仁史)

■会 期：3月14日(金)～4月13日(日)(無休)

■会 場：第3特別展示室

■料 金：一般400円(団体200円)

■関連行事

・学芸員講座「鳥取の埴輪」

3月23日(日) 14:00～15:30

・体験考古学講座「埴輪を作ろう」

3月20日(木・祝) 13:00～15:30

小学校高学年とその保護者

定 員：30名(要申込)、参加料：200円

・ギャラリートーク

3月15日(土)、29日(土)、4月12日(土) 14:00～

共同企画展

郷土作家展

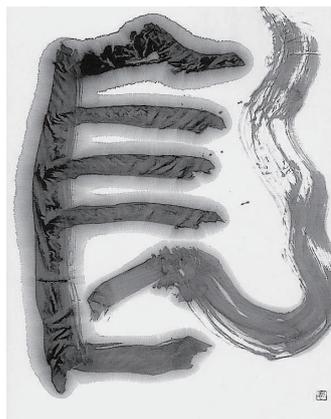
書の宇宙・陶の大地 柴山抱海・山本浩彩

「郷土作家展」は、鳥取県ゆかりの作家にスポットライトをあて、その業績と作品を広く県民に紹介することを目的として開催し、県内3会場を巡回します。

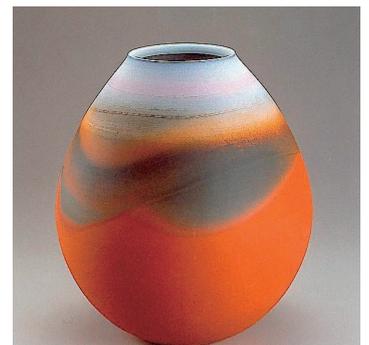
第5回になる本年は、全国規模の公募展に出品・受賞をかさねるとともに、県内外はもとよりハワイ・中国等海外でも精力的に個展を開催する、鳥取県には数少ない現代書家・柴山抱海(1941年～、鳥取市在住)と、全国規模の公募展に出品をかさね「茶の湯の造形展」優秀賞や「日本伝統工芸中国支部展日本工芸会賞」等を受賞する、鳥取県を代表する現代陶芸家の一人・山本浩彩(1949年～、倉吉市在住)を紹介します。

二人の特徴的な表現世界を鑑賞いただければと思います。

(美術担当学芸員 門脇 博)



柴山 抱海 《長》 2005年



山本 浩彩《焼締窯変西壺》2005年

■会場・会期

・倉吉博物館
平成20年1月26日(土)
～2月10日(日) 月曜休館

・米子市美術館
平成20年2月16日(土)
～3月2日(日) 水曜休館

・鳥取県立博物館
平成20年3月12日(水)
～3月25日(火) 会期中無休

■料 金 一般400円(団体200円)

観 察 ガ イ ド

せん だい がわ

千代川の川原の石

鳥取市河原町和奈見橋付近

私たちが暮らしている鳥取県の大地は、どのようにして今の姿になったのでしょうか？

これを知るには、野外で地層や岩石が現れている崖(これを露頭といいます)をよく観察しなければいけません。

しかし、露頭はどこにでもあるわけではなく、観察に適した露頭が身近にあることは少ないものです。

ところで、川原にある石は、川の水(流水)のはたらきで、上流にある岩石が削られたり、運ばれてたまっていったもので



野外観察会「川原の石を調べよう!」の様子

す。ですから、川原の石を調べれば、間接的に上流の露頭で見られる岩石を調べることになるわけです。

鳥取市河原町和奈見橋付近は、鳥取県東部を流れる千代川の中流域にあたる地点で、河床には三郡変成岩に属する枕状溶岩(海底火山が噴火したときにできる溶岩)が露出しており、学術的に重要な地域です。そのため、最近頻繁に行われている河川の改修工事からまぬがれ、自然のままの川原が残されています。川原には、国道53号線から和奈見橋を渡り、上流方向へ200メートルほど進むと簡単に移動でき、千代川が運んだ多量の石を観察することができます。

川原で観察できる石の種類は、千代川上流域や周辺の地質を反映し、たい積岩類(砂岩、チャート)、火成岩類(安山岩、玄武岩、花崗岩、閃緑岩)、変成岩類(珪質片岩、黒色片岩、緑色片岩)などです。石の種類を見分ける手だてとしては、

①鉱物(岩石をつくる粒)がぎっしりつまっていて、黒っぽい鉱物がごま塩のように見える。→花崗岩・閃緑岩

②全体的に灰色で、白っぽい鉱物が斑点状に見られる。→安山岩

③全体的に色が黒や緑や白っぽく、石を横から見るとしま模様になっていて、そのしま模様によってはがれやすい。→変成岩類

といったことがありますが、風化していると見分けにくいので、なるべく新鮮な石を拾い、わかりにくいときは、釘で傷がつくかどうか見たり、石を割って中の鉱物の色や形をルーペで確かめてみるというでしょう。

みなさんも、川原に出かけ、そこに見られる石を観察してみたいかがでしょうか。川原の石は、私たちに自分たちが暮らしている大地の生い立ちをそっと語りかけてくれます。

(自然担当学芸員 山口 勇人)

資 料 紹 介

インコモリグモの拡大模型

日本を代表する海岸砂丘である「鳥取砂丘」は、雄大な景観や風紋だけでなく、砂丘独特の植物や海浜性の希少動物が数多くみられることでも貴重な場所です。この動物のひとつにインコモリグモ(コモリグモ科)というクモがいます。鳥取県立博物館では、このクモの10倍拡大模型を展示しています。体がふたつに分かれ、触角がなく、目が8個などのクモの特徴を観察するのに最適ですが、それだけでなくインコモリグモを知ることによって、砂丘の保全についても考えていただければと思っています。

インコモリグモは、文字どおり雌親が卵のうや子グモを保護します。この保育習性が珍しいといわれたりもしますが、実はコモリグモ科の全種に共通する習性です。インコモリグモで特筆すべきは、

コモリグモ科のほとんどが徘徊性であるなか、本種は砂浜に10~20センチほどのたて穴の巣(住居)を掘って生活していることです。夏季の砂丘の地表温度は50度を超えます。高温では多くの生物が死んでしまいます。しかし、地表からほんの数センチもぐらただけで、最高温度は10度ほども低下します。インコモリグモに限らず、砂丘に生きる動物は避暑対策として、砂中に掘った穴や海浜植物の根もとなどをうまく利用しているのです。

北海道と島根県以北の本州のおもに日本海側の海岸砂丘に生息しているインコモリグモですが、海岸砂丘は全国的に減少傾向にあり、絶滅が心配されています。インコモリグモが良好に生息していることは、砂丘が健全である証



インコモリグモ *Lycosa ishikariana* の拡大模型

拠でもあります。鳥取砂丘の保全を考えると、風紋などの景観だけでなく、砂丘の植物やそこに暮らす動物に目を向けることは重要です。本当の生きた砂丘とは、砂が動き風紋ができるだけでなく、砂丘環境に適応した植物や動物がたくさんみられる場所なのです。

(自然担当学芸員 川上 靖)

三仏寺 蔵王権現立像(複製)

最近の技術を駆使して製作

当館では、歴史民俗常設展示室の展示内容を充実させるため、年次計画で複製資料を製作しています。「本物」の実物資料に比べ、少し軽く見られる傾向のある複製資料(通称「レプリカ」)ですが、その利点はなんでしょうか。

国宝や国重要文化財に指定されている文化財は、その多くが国立博物館に収蔵され管理されます。また、神像や仏像は、本来社寺で祀られて信仰の対象であるため、門外不出です。ところが、それらの文化財は、もちろん鳥取県の歴史を語る上で重要な資料であるため、複製であっても展示に不可欠なのです。

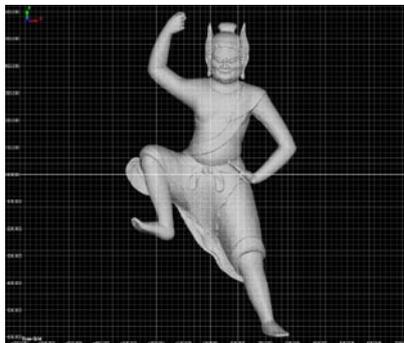
実際に当館の展示資料のなかで述べてみましょう。「古代」のコーナーには、

三徳山三仏寺の木造蔵王権現立像(重要文化財)の複製を、投入堂(国宝、三仏寺奥院)模型とともに展示しています(写真 右上)。

三仏寺の宝物殿を訪れたことのある方は御承知だと思いますが、この蔵王権現像は「正本尊」と呼ばれ、門外不出で有名です。それが何と、三徳山開

1300年を機に複製を製作させていただくことになりました。通常、仏像のような彫刻は型取りをして複製を製作するのですが、こちらの蔵王権現像は信仰的な制約もさながら、仏像本体の表面の漆箔がはがれかけていることから、「像本体に接触することないよう」作業をするという難題に直面しました。それをクリアしたのは、最新技術の導入です。

仏像に触れることなく、各部位の大きさや形状を計測するため、大手前大学歴史学研究所(オープンリサーチセンター)に、レーザースキャナーによる計測を依頼しました。複数の方向(175箇所)から計測したデータを貼り合せて、仏像の三



次元データ(デジタル記録)を作成していただきました(写真中下)。

次に、この計測データを基に、原型を作りました。その原型も、ナイロンの粉末にレーザーを当てて固めるという最新の工業技術を用いています。そして原型を型取りし、FRP(強化プラスチック)で本体を作ったあと、実物資料と比較しながら成形、彩色を経て完成しました。

どうぞ展示室で最新技術を駆使して製作した蔵王権現像をご覧ください。

ところで、当館の蔵王権現像、立体計測したので、「寸分違わぬ」分身のはずですが、実物の持つ雰囲気には負けています。やはり博物館の展示資料としては、「仏作って魂入れず」だからでしょうか。

(人文担当学芸員 福代 宏)

コラム

流れ着いた江戸のクジラ

県土の北側が日本海に面する鳥取県では、ダイオウイカ、クジラ、マンボウなど、多様な海洋動物が海岸に漂着します。そうした漂着動物の標本類は、当館の自然常設展示の人気コーナーのひとつですが、今回はそのような現代の漂着動物ではなく、江戸時代の記録に見られる漂着事例、その中でもクジラについてご紹介します。

鳥取藩士岡島正義(1784~1858)が記した鳥取藩の歴史書「因幡年表」には、因幡・伯耆の海岸に打ち寄せられた漂着動物に関する記述が多く見られます。その中でクジラの漂着事例は、表のように6件あります。漂着時期は、主に旧暦の12~3月、日本海の海水温が低く、北西の強い季節風が吹く季節に多かったことがわかります。

流れ着いたクジラのその後について、1832年12月、夏泊(鳥取市青谷町)

に流れ着いたザトウクジラを例に見てみましょう(表の4)。まず、沖合に漂流していたクジラを漁師が港まで引き込み、浜辺に陸揚げしたのち、見物人が見守る中、鳥取藩の役人が検査を行い、解体作業が行われました。このザトウクジラは、全長約27m、口のサイズは小船が1艘入るほど、舌の長さは約5.4m、幅約2.7mであったと記録されています。

解体されたクジラの肉は、製油用として売られ、売り上げは金200両程度でした。また、クジラの下に引いていた菰と油が染みた砂は、肥料として近隣の農民らに販売されました。これらの代金は、3分の2を地元、残りを藩に配分され、地元住民らはこのお金を使ってクジラの弔いを行いました。

これら漂着クジラは、多くの見物人を集めました。1836年、浜坂灘に漂着

した際には、「見物の人が吹雪をもちとわず、大勢浜辺に押し寄せた」とあります。現代でも漂着動物のニュースは、マスコミにぎわせ、人々はそのほく製を一目見ようと博物館に出かけます。これは、時代と見物する場所は変わっても、未知なる海から流れ着くものに対する、人々の興味が変わらないことを示しているのではないのでしょうか。

(人文担当学芸員 大嶋 陽一)

クジラ漂着年表

	年月日(旧暦)	漂着場所	サイズ
1	1808年2月18日	浦富(岩美郡岩美町)	約55m
2	1810年2月4日	羽尾灘(岩美郡岩美町)	約30m
3	1830年3月16日	泊(東伯郡湯梨浜町)	約15m
4	1832年12月	夏泊(鳥取市青谷町)	約27m
5	1835年12月	御来屋(西伯郡大山町)	不明
6	1836年1月	浜坂灘(兵庫県新温泉町)	不明

屏風は、部屋を仕切り室内を彩る調度品として、古来より広く人々に親しまれてきました。その起源は古く、中国で漢時代には既に風よけとして利用されていたことが確認されています。

今日、私たちが目にする、木の骨組に紙や絹が貼られ、折り畳むことが可能な紙の蝶番をもつ屏風は、日本で考案されたと考えられています。もともと中国や朝鮮の屏風は、蝶番が紐や金具であったため、1扇(1面)ごとに画面が区切られていました。それに対し、日本で考案された紙の蝶番は、屏風を一枚の連続した大画面にすることを可能としました。

屏風の用途は多岐にわたり、時代の要請と目的に応じて、大小様々な形の屏風が生まれました。とりわけ近代に入ると、依頼主の趣向の強かった江戸時代に比べ、描かれる対象も多

種多様となり、各所に作家の個性が表れた屏風が多く作られるようになりました。

このたび当館では、屏風をテーマにした展覧会を10月に開催します。鳥取県ゆかりの作家を中心に、近世から現代まで、新旧様々な屏風を集めます。六曲屏風に描かれた大画面絵画の迫力から、近代の情緒あふれる小屏風に見られる“小粋”の世界まで、掛軸や額縁とは異なる、屏風ならではの表現の魅力について、感じていただければと思います。

(美術担当学芸員 林野 雅人)



小早川秋聲「薫風屏風」(右隻)

新収蔵品紹介

おきいちが 沖一峨「花鳥図」 絹本着色、江戸時代後期

当館では、平成18年度に4点の美術作品を購入しました。今回はその中の一点、沖一峨の「花鳥図」(二幅)を御紹介したいと思います。

沖一峨(1796~1861)は、江戸時代後期に江戸で活躍した、鳥取藩のお抱え絵師です。本作は、平成18年秋に当館で開催した特別展「沖一峨—鳥取藩御用絵師—」の中で展示されたものですので、ご覧になった方もいらっしゃると思います。幅広い画風を示し、さまざまな画題を描きこなした一峨ですが、その中でも華麗な花鳥画は、一峨が最もその技量を発揮した分野と言えるでしょう。本図に見られる鮮やかな色彩、精緻に描かれた花びらや小鳥の様子に、一峨の技量の一端が垣間見られます。この作品にはどうやら基となった作品があったようで、ほぼ同構図をもつ円山応挙の「花鳥図」(大英博物館蔵)も知られています。

このように古画の筆法や形態に倣うことは、日本の美術史において重要なこととして古くから行われていましたが、そうした作品の中にも、作者の個

性や時代性といったものが自ずと、あるいは能動的に表出されているものです。本作においても、例えば左幅左上に、応挙の作品には描かれない「ニガウリ」が描かれています。真っ赤に熟した種をのぞかせたニガウリの表面の皮は、胡粉という貝殻を磨り潰した白い顔料の上に黄色の絵の具を載せることで、その凹凸が見事に表現されています。一峨はこのニガウリを描くのを楽しんだようで、彼の花鳥画にはしばしば登場しています。

(調査担当学芸員 山下 真由美)



おきいちが 沖一峨「花鳥図」

日本において学芸員はしばしば揶揄的に「雑芸員」と呼ばれます。実際に多くの学芸員が展覧会の企画や作品の貸し出しはもとより、作品の展示に立会い、チラシやポスターのデザインや校正、カタログの編集といった多種多様の仕事をこなしています。

海外の美術館や博物館の場合、学芸員の仕事は細分化されています。かつてクーリエの仕事でローマの国立近代美術館に行った際、展覧会を担当する学芸員が展示に一切立ち会わないことに驚きました。展示を仕切るのは美術館専属の建築家です。美術館の構造を熟知した彼は展示する作品のサイズや形状を完全に暗記した上で、最も展示効果が上がるように作品を配置していきました。日本でもかつて東京都現代美術館でアンソニー・カロの個展を開いた時に作家と親交のある建築家の安藤忠雄が会場を構成して、みごとな空間を創り出しましたが、これは例外中の例外です。

このほかにも欧米ではカタログの編集者、修復の専門家、作品管理の専門家、資料調査の専門家が仕事を分担して一つの展覧会にあたります。それぞれ専門性が高く、お互いの仕事に口を挟むことはあまりありません。展覧会是一个プロジェクトで、いろいろな分野の専門家がプロジェクト・チームを作って実現に向かうと言ってよいかもしれません。もちろんこの前提としては美術館や博物館の規模と組織が大きいこと、様々な仕事の専門化が進んでいることが挙げられます。近年、日本でも次第にこのような傾向が強まり、いくつかの美術館では修復に関して独立した部署を設けるようになりました。新設の美術館の中にはエデュケイターやレジストラーや横文字そのままの新しい肩書のもとに仕事をしている学芸員がいます。今後はこれまで学芸員の代名詞であったキューレーターという職種も美術館や博物館における仕事の一つになるかもしれません。

専門化と分業化は美術館や博物館にとって避けることのできない趨勢です。それによって仕事の効率化と完成度は高まるでしょう。しかしこれまで所蔵家や作家との交渉、カタログの執筆、会場の展示構成の立案から実際の作品借用まで、同僚の助けを受けながら展覧会を一人でこなしてきた私にとって展覧会全体に目を配ることができる日本的な学芸員の仕事も大変ではありますが、別の意味で大いに魅力的に感じられます。

(美術振興課長 尾崎 信一郎)

山陰海岸学習館だより

夏のイベント大盛況!

山陰海岸学習館の夏のイベント「磯の観察会」と「浦富海岸スノーケリング体験」は今年も大好評でした。2007年の夏休み「磯の観察会」では、参加者を10家族に限定して内容の充実を図りました。観察会当日の午前中は海に出ていろいろな生きものを講師の先生とともに採集し、午後からは捕まえた海の生きものをじっくり観察するための水槽作りを行いました。また、ウニの精子と卵を使った受精実験やヒトデの起きあがりレースも行い、楽しみながら海の生きものの生態を学ぶことができました。8月下旬に実施した「浦富海岸スノーケリング体験」(9月と10月にも実施予定)は申込日初日で定員に達するほどの人気で、透明度の高い浦富海岸でマジの群れやカラフルなウミウシなどを見つけ、さまざまな海の生きものと触れ合うことができました。

上記のように現在の山陰海岸学習館は野外観察会を中心に活動を展開していますが、今年度末からは館内のリニューアルを始めます。その第一弾として、エントランスの大型水槽を一新します。新しい水槽では野外観察会ではめったに見ることができない海の生きものの繁殖の様子や興味深い行動などを目の前で観察できるようになります。海の生きものの知らせざる生態やひたむきな生きざまは、きっと驚きの連続です。皆さま、お楽しみに!

(山陰海岸学習館 和田 年史)



普及活動一覧

野外観察会「浦富海岸スノーケリング体験」
10月7日(日) 9:00~16:00/城原海岸または熊井浜
[対象] 高校生以上

受付終了

自然講座「モサエビを調べる会」
10月21日(日) 13:00~15:00/山陰海岸学習館 体験学習室
[対象] 一般(小学生以下は保護者同伴)

申込期間 10/7(日)~

野外観察会「日本海のみみつをさぐる」
①11月11日(日)「~浜辺の漂着物拾い~」
②12月2日(日)「~タカラガイ調査~」
③1月20日(日)「~なぜ、漂着物が多いのか~」
9:00~12:00/山陰海岸学習館 体験学習室

[対象] 一般(小学生以下は保護者同伴)

申込期間 10/28(日)~

自然講座「海藻おしぼを楽しむ」
11月24日(土)13:00~15:00/山陰海岸学習館 体験学習室
[対象] 一般(小学生以下は保護者同伴)

申込期間 11/10(土)~

自然講座「漂着物アートを楽しむ」
2月10日(日)13:00~15:00/山陰海岸学習館 体験学習室
[対象] 一般(小学生以下は保護者同伴)

申込期間 1/27(日)~

野外観察会「一足先に海岸の春を探す(植物・地形地質編)」
3月29日(土) 9:00~15:00/羽尾岬周辺または城原海岸
[対象] 一般(小学生以下は保護者同伴)

申込期間 3/15(土)~

鳥取県立博物館附属 山陰海岸学習館

■開館時間:9時~17時(7月・8月の毎週土曜日は18時まで開館)(入館無料)
■休館日:原則として月曜日(祝日の場合は翌日)(7/20~8/31の間は毎日開館)
【お問い合わせ】〒681-0001 鳥取県岩美郡岩美町牧谷1794-4
電話・FAX:0857-73-1445 E-mail: saninkaigan@pref.tottori.jp

お知らせ

空調設備の改修

県立博物館は昭和47年に建設され、資料保管を考えた当時としては進んだ施設でしたが、そのころは十分とされていた保管環境も、今では十分とはいえません。適正な保管環境は、収蔵品によっても異なりますが温度は22℃~25℃、湿度は45%~55%といわれています。しかし、現在の設備では、温度を保ったり、乾燥時に加湿することで湿度は保てますが、除湿については容易ではありません。そこで、平成19年度より3カ年

計画で空調設備を改修することになりました。

内容のひとつは、1台の空調機で二つの部屋の空調を行っていたものを、個別の空調機を設けることにしました。また、今回の改修の目玉として、電気式の熱源を増設し、同時に温水と冷水を作り、低温高湿の時期であっても除湿再熱を行うことで、温度と湿度が一定に保つことが可能となります。当館の空調設備はまだまだ十分とはいえませんが、空調設備は資料管理の重大な条件の一つなので、今後も資料保管環境の整備を検討していきたいと思います。(設備係長 山懸 雅彦)

新着情報

「鳥取県の祭り・行事」データベースを公開

当館では、鳥取県内の祭りや年中行事に関する情報をホームページ上で公開しています。このデータベースは、検索画面でテーマや期日、地域、キーワードで検索でき、知りたい情報をすぐにチェックできます。また、画像や映像も御覧いただけ、開催場所を地図で確認できるのも特徴です。学校の地域学習から一般の歴史・民俗研究まで広く活用していただきたいと思います。

利用方法(アクセス方法)は右のとおりです。

- ①鳥取県立博物館のホームページからアクセスする場合
(<http://www.pref.tottori.jp/museum/homepage.htm>)
鳥取県立博物館→「デジタルミュージアム」→「鳥取県の祭り・行事」→トップページ→検索画面→一覧画面を経て、祭り・行事の詳細画面表示
- ②「鳥取県の祭り・行事」へ直接アクセスする場合
(http://digital-museum.pref.tottori.jp/contents/jin601_search.asp)



(人文担当学芸員 福代 宏)

美術常設展示

【1階 美術展示室】

鳥取県にゆかりのある仏像、工芸品等の常設展示のほか、下記の計画で近代以前の絵師の作品を展示します。

会期	展示名
10月3日(水)~11月11日(日)	稲嶺Ⅱ 鳥取藩絵師土方稲嶺の没後200年を機に前・後期に分けて、その画業を紹介します。
11月14日(水)~12月27日(木)	稲嶺と稲草 稲嶺とその弟子黒田稲草の作品を中心に展示紹介します。
3月12日(水)~4月20日(日)	近世絵画にみる風景表現 鳥取藩絵師の風景を描いた作品を展示紹介します。

【2階 美術展示室】

鳥取県にゆかりのある、近現代の美術作品を展示します。

会期	展示名
10月2日(火)~ 10月24日(水)	悠久の美 -屏風の世界- 伝統的な表現様式である屏風の秘めたる魅力に迫ります。

INFORMATION お知らせ

講座・観覧会・アートシアター

LECTURE・FIELD STUDY・ART THEATER

■ 自然部門 ■ 人文部門 ■ 美術部門

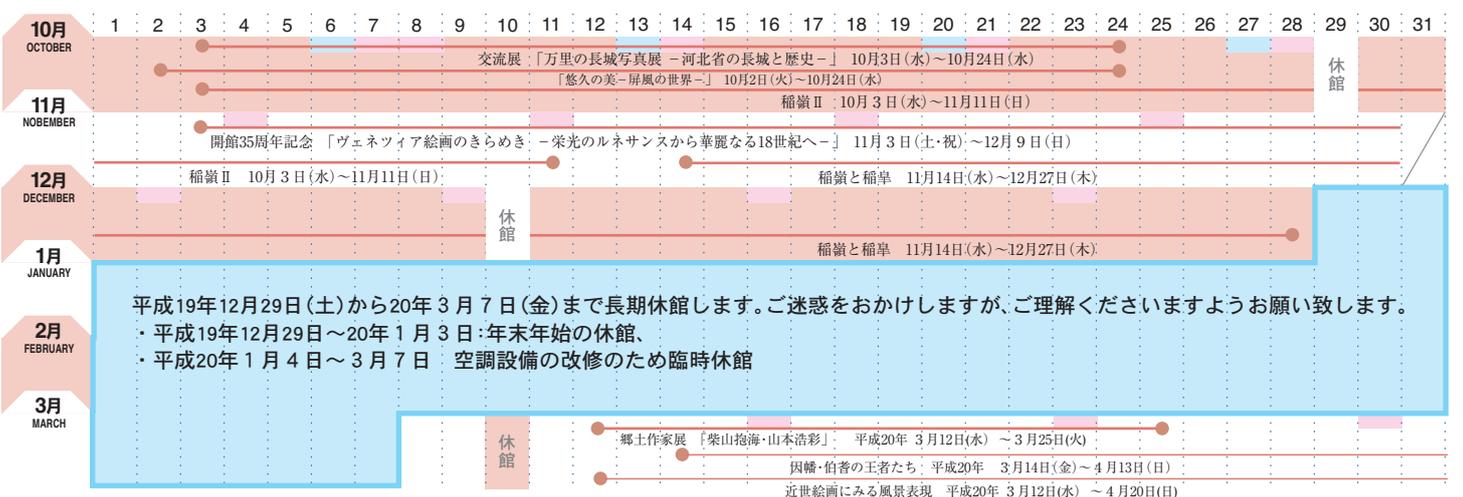
2007 10 OCT.	《学芸員講座》 「屏風の世界」	■日 時 10月6日(土)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名
	《天体観望会》 「秋の星を見る会」	■日 時 10月6日(土)18時30分～20時30分 ■対 象 小学生以上(小学生は保護者同伴)
	《野外観察会》 「キノコを調べる会」	■日 時 10月14日(日)10時～14時 集合時間:10時 ■集 合 場 所 鳥取市桂見「とっとり出会いの森」 ■対 象 要申込・小学生以上(小学生は保護者同伴)
2007 11 NOV.	《アートシアター》 「レンゾ・ピアノ ーピース・バイ・ピースー」	■日 時 10月14日(日)14時～ ■対 象 一般・定員250名
	《県立博物館・県立図書館連携講座》 「郷土の資料を読む会」 近世の紀行文を読む④	■日 時 10月27日(土) 15時～17時 ■会 場 鳥取県立図書館2階小研修室 ■対 象 一般・定員30名
	《自然講座》 「秋の贈り物でリースを作ろう！ ーどんぐり・落ち葉の学習ー」	■日 時 11月4日(日)9時～12時 ■集 合 場 所 県立博物館会議室および博物館周辺 ■対 象 要申込 幼稚園・小学生以上(小学生以下は原則として保護者同伴) 定員:30名(先着順)
	《ミニコンサート》 「イタリアの響き」	■日 時 11月10日(土)13時～13時45分 ■対 象 一般・定員250名
	《記念講演会》 「ヴェネツィア絵画の魅力」	■日 時 11月11日(日)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名
2007 11 NOV.	《記念講演会》 「水の都ヴェネツィアに魅了された人々 ーターナー、ラスキン、そしてモネー」	■日 時 11月18日(日)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名
	《アートシアター》 「ヴェネスの商人」	■日 時 11月23日(金・祝) 14時～ ■対 象 一般・定員250名(先着順)
	《県立博物館・県立図書館連携講座》 「郷土の資料を読む会」 鳥取藩の古文書を読む①	■日 時 11月24日(土) 15時～17時 ■会 場 鳥取県立図書館2階小研修室 ■対 象 一般・定員30名
	《学芸員講座》 「東伯耆の藩倉」	■日 時 11月25日(日)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名

2007 12 DEC.	《学芸員講座》 「水都ヴェネツィアの社会と絵画」	■日 時 12月1日(土)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名(先着順)
	《人文講座》 「鳥取県の民話を聞く会(2)」	■日 時 12月16日(日) 14時～15時 ■対 象 小学校低学年
2008 1 JAN.	《学芸員講座》 「幕末の鳥取藩」	■日 時 12月15日(土) 14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名
	《県立博物館・県立図書館連携講座》 「郷土の資料を読む会」 鳥取藩の古文書を読む②	■日 時 12月22日(土) 15時～17時 ■会 場 鳥取県立図書館2階小研修室 ■対 象 一般・定員30名
2008 2 FEB.	《特別講演会》 「子どもと神さま」 「酒津のトンドウ」を中心にー	■日 時 12月23日(日・祝)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名
	《県立博物館・県立図書館連携講座》 「郷土の資料を読む会」 鳥取藩の古文書を読む③	■日 時 1月26日(土) 15時～17時 ■会 場 鳥取県立図書館2階小研修室 ■対 象 一般・定員30名
2008 3 MAR.	《県立博物館・県立図書館連携講座》 「郷土の資料を読む会」 鳥取藩の古文書を読む④	■日 時 2月23日(土) 15時～17時 ■会 場 鳥取県立図書館2階小研修室 ■対 象 一般・定員30名
	《学芸員講座》 「はじまりの物語」 ー縁起・由緒書に見る因幡・伯耆の歴史像ー	■日 時 3月9日(日) 14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名
	《企画展講演会》 体験考古学講座「埴輪を作る」	■日 時 3月20日(木・祝)13時～15時30分 ■対 象 小学高学年とその保護者・定員30名
	《学芸員講座》 「鳥取県の染織家たちⅡ」 鳥取県中部編	■日 時 3月22日(土)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員40名
	《企画展学芸員講座》 「鳥取の埴輪Ⅲ」	■日 時 3月23日(日)14時～15時30分 ■対 象 一般・定員250名

※特に記載のないものは、申込不要、無料です。※申込み・お問い合わせは学芸課(自然・人文部門)または美術振興課(美術部門)へ

展覧会カレンダー EXHIBITION CALENDAR

■ 土曜(10月中は午後7時まで閉館) ■ 日曜・祝日



編集後記

MUSEUM PRESS / 鳥取県立博物館ニュース④をお届けすることになりました。今回から企業広告の掲載を始めました。鳥取県立博物館では、より質の高い情報を多様な方法で提供し、みなさまに愛される博物館を目指して参ります。MUSEUM PRESSの情報は右記ホームページからもご覧いただけます。あわせてご利用ください。

鳥取県立博物館ニュース MUSEUM PRESS No.4

平成19年(2007年)9月30日発行
編集・発行 鳥取県立博物館
住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地
TEL 0857(26)8042(代)
FAX 0857(26)8041
URL <http://www.pref.tottori.jp/museum/homepage.htm>
E-mail hakubutsukan@pref.tottori.jp



JR鳥取駅からバスで
100円バス「くる梨」青コース
「⑤仁風閣・県立博物館」下車すぐ
砂丘・湖山・賀露方面行
「西町」下車約400m
市内回り岩倉・中河原方面行
「わらべ館前」下車約600m



質の高い地域密着型金融サービスで、お客さまにご満足をお届けする銀行
青い鳥の銀行です。
鳥取銀行